43　ルイの「肺炎に対する瀉血の効果」について

藤倉一郎

P.C.A.ルイは古来から、流派をとわず多くの医師によって、行われていた瀉血がまったく治療効果を持たないことを一八三五年「炎症にたいする瀉血の効果の研究」で発表した。炎症患者にたいして、ほとんど儀式的に行われていた瀉血が盲目的に有効と信じられていたのにたいして彼の研究によれば大幅な違いがあった。そのため発表にはかなりの躊躇いがあった。瀉血にかんする事実を分析して彼自身が驚嘆したのであるが、再三の検討によっても同じ結果をえたので、敢えて発表することにしたのであった。肺炎、エリジペラス、扁桃炎がもっともありふれた炎症であるので、これらが研究の主役であった。

肺炎における瀉血の研究は一八二一年から一八二七年にかけて七八症例についての研究であり、この内五〇例は生存し、二八例は死亡している。

一、病期と最初の瀉血の関係

表をみると発病後二日間に瀉血した患者は短期間で改善し予後がよい。瀉血を最初の二日間にするなら、病期は短縮するが、これは瀉血の前に生活の規制を乱す余地がないために治療に悪影響がないのである。発病三日以後に瀉血した患者では生活が乱れ、大酒をのみ、ブランデーをあおって罹病期間が延長してしまうのである。つまり発病後三日以後では早くても遅くてもあまり違いがない。病期が大幅に変化している四日目瀉血群では、ある患者は一二日で回復し、他のものは極端なものを除いても二五日とか二八日を要している。治療は同じ内科医が同じように治療しているので、治療に差異はない。これらのことから瀉血の有効性は大変限定されてくる。

瀉血の回数は二―三回であり、一回の瀉血量は三〇〇―四〇〇mlである。

二、年齢との関係

発病四日以内に瀉血した患者の平均年齢は三三歳であ

り、発病五日以降に瀉血した患者の平均年齢は三六歳であった。前者は四一例でうち一八例が死亡しており、四三％の致死率である。後者は三七例で九例死亡していて、二五％の致死率である。

年齢と瀉血の予後には関係は見られない。

三、その他

瀉血後、疼痛は軽減しない。反対に一二乃至二四時間に亙って疼痛は増加することがわかった。

喀痰についてみると、発病三日以内の瀉血では、五日間喀痰はつづき、四乃至六日の瀉血では六日、七日以降の瀉血では七日間喀痰の排泄が止まらなかった。

脈拍では、瀉血してから頻脈がつづき、四日から七日もつづく、場合によると次の瀉血までつづいていることもある。

発熱と発汗は、瀉血後、場合によってはすぐ止まることもあるが、発汗は発熱よりも長くつづき、他の症状とおなじく六日くらいはつづく。

肺炎にたいする瀉血の効果としては以上のことが判ったが、著者の目的は炎症にたいする瀉血の効果にたいして、注意を喚起することにあるのだと締め括っている。私たちからみると極めて初歩的な数値分析が、当時は科学的な思考の始まりだったのである。ルイの正面きった批判が数千年の歴史をもった瀉血という治療方法を一挙にくつがえすということは無かったが、数十年かけて、瀉血はようやく下火になっていくのである。

（一期会・藤倉病院）